

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
<b>[特別寄稿]</b>	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
<b>[対照研究]</b>	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
<b>[日本語研究]</b>	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
<b>[中国語研究]</b>	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究

—「精神」を例として—

A Chinese-Japanese Comparative Study of Homomorphic Words Based On  
“extended unit of meaning” — “spirit” as an example—

梁 鵬飛  
LIANG Pengfei

**提要** 本研究以中日同形詞為研究對象，以施建軍等的一系列研究為基礎，從方法論的角度做出了新的嘗試。本研究基於語料庫語言學視角，以 Sinclair 提出的“擴展語義單位”為理論模型，運用漢語、日語均衡語料庫對中日同形詞“精神”的異同進行了對比分析，運用中日對譯語料庫對“精神”的對譯情況進行了考察，並對以“擴展語義單位”為理論模型的分解結果進行了驗證。“擴展語義單位”模型可以為中日語言對比提供一種好的研究方法。

**キーワード**：拡張意味単位 日中同形語 コーパス コロケーション

## 目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究設計
4. 結果と考察
5. 結語

### 1. はじめに

中国語と日本語には、数多くの同形語があり、日中同形語の研究が日中対照研究の重要な課題の一つになっている。施・洪（2013）は数多くの先行研究をまとめて、個別の同形語あるいは少数の何語を対象にした研究が多くあるのに対して、体系的な方法論面の研究が少ないという問題点を指摘した。本研究はコーパス言語学の立場から、諸先行研究で提案した研究方法を再整理して、方法論のさらなる体系化を試みる。

コーパスを使う利点として、大量の例文検索や計量分析に向いているという量的な面のほか、石井(2014)が指摘した「従来の研究では異なるレベルの現象として別々に扱われることの多かった、語構成・句構成・文構成・文章構成に関わる言語項目の用法を、同時に扱うこ

とができるということである。」という質的な利点もある。こんな利点を生かした研究として、Biber が提案した「連結パターン」(association pattern)や Sinclair が提案した「拡張意味単位」(extended unit of meaning, EMU と略称)などが挙げられる。

Sinclair が提唱している「拡張意味単位」モデルは、従来のコロケーション分析を拡張した理論である。近年では、一部の学者が「拡張意味単位」の理論に基づいて、これまでの単一言語における利用を超えて、両言語間の語彙項目のコロケーション、コリゲーション、意味的選好性、意味的韻律の異同を調査した研究が現れてきた。(Sardinha 2000、Togni-Bonelli 2001、田 2014、濱 2014 など)。日中同形語の対照分析には、こんな分析方法も適用できると思う。

同形語の対照分析をするとき、それぞれ日本語の均衡コーパスと中国語の均衡コーパスを使って、両言語における使用実態をまとめてから比較する方法がある。しかし、使った両均衡コーパスには、対訳コーパスのような意味的なつながりを持っていないという問題点が残る。つまり、相互的に無関係な内容の材料を使って同形語の使用実態を比較するのは、本当に信頼できる結果が得られるかという問題が出てくる。そういう問題点を解決するために、得られた結果をさらに、対訳コーパスで対訳状況を調べて補足する方法が考えられる。

中日両言語においては、抽象的な意味を表す名詞が常に高頻度語であり、文脈においては他の語と組み合わせてから意味の概念化や文法機能が実現され、そのコロケーションも常に複雑である。本稿では、Sinclair が提唱している「拡張意味単位」という分析の枠組みに基づいて、両言語において共に高頻度語である「精神」を分析例として調査してみる。

## 2. 先行研究

日中同形語に関しては、数多くの先行研究が残っている。施・洪 (2013) では、日本文化庁 (1978, 1983)、荒川 (1979)、守屋 (1979)、大塚 (1990)、大河内 (1992)、宮島 (1993) 等の諸先行研究をまとめたうえで、日中同形語の意味用法を分析する“層次分析法”を提案した。図 1 の示した“層次分析法”とは“意義→詞性→句法功能→搭配关系”の順序で層別に考察する方案である。氏自分も指摘しているように、この方案には語の“感情色彩”の分析が含まれていない。

氏が行った一連の日中同形語の研究には、コーパス言語学の立場から日中同形語の分類を提案する施(2014)、同形語の意味用法の距離を測る方法を提案する(施・濱 2016)、意味の結合関係に基づく日中同形語の意味の対照研究を行った(施・洪 2017)などもある。同形語の違いを四つのレベルに分けて、層別的な分析法を提案した点 (施・洪 2013)、研究者個人の内省の限界性を指摘して、コーパスを使うことの重要性を強調した点 (施 2014)、対訳コーパスを使って対訳率を活用した F-measure で同形語の意味用法の距離を測る方法を提案した

点(施・譙 2016)、同形語の意味の違いを「意味の範囲の違い」、「意味が具体的か抽象的か」、「意味が積極的か消極的か」にまとめた点(施・洪 2017)など、多くの示唆の富んだ成果を出している。

しかし、「体系化」という考えから見れば、これらの点が“層次分析法”とどう結びつけて体系化すべきかという面からみれば、まだ改善の余地があると思う。また、コーパスの利用について、単一言語コーパスと対訳コーパスをどう使い合わせばよいのかという問題点も残る。

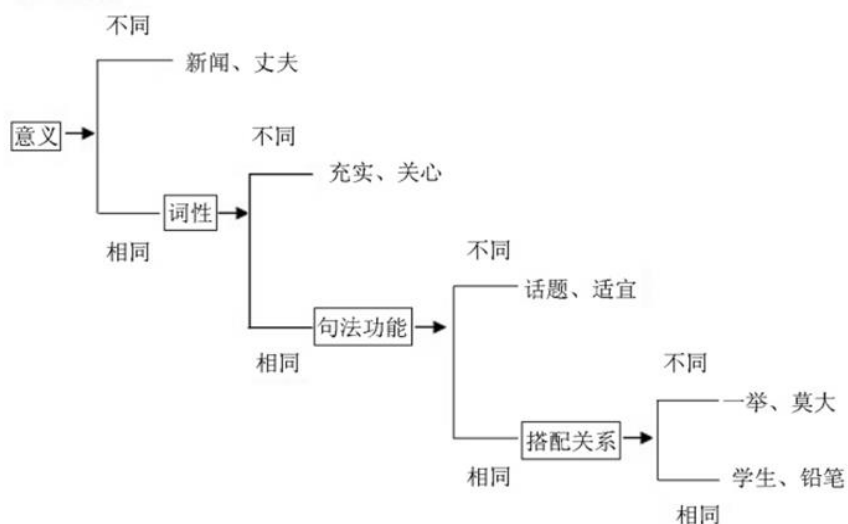


図 1. 汉日同形词意义用法差异的层次分析

施・洪 (2013) からの引用。

前述した問題点を解決するため、本研究はコーパス言語学の立場から、これらの一連の研究で提案した方法を再整理して、さらなる体系化を試みる。

### 3. 研究設計

ここでは、まず、日本語研究とのかかわりを交えながら、Sinclair が提唱している「拡張意味単位」について紹介する。それから、本研究で使うコーパスと検索ツールについて紹介する。

#### 3.1 理論的な枠組み

これから紹介する「拡張意味単位」という概念が日本の研究にはあまり使われていないが、関係のある用語として、「コロケーション」がある。日本語の研究においては、コロケーションという用語がまだ定着していないのが今の現状である。研究者それぞれによっては、その理解や解釈が異なっている。「連語」との違いをも含めて、日本語のコロケーション研究をめぐる諸問題を総括的にまとめている研究には田野村(2012)がある。氏がコロケーション研究を慣用性研究の一部と位置づけている。慣用性研究の対象を a) 言語事象に関する慣用性。b) 非言語事象に関する慣用性。c) 言語事象と非言語事象の関わりに関する慣用性という三種類

に分けている。氏がさらに a) を単一要素の慣用性と複数要素の慣用性に分けて、コロケーションは後者に含まれると指摘している。コロケーションの定義については、「広い視野で多様な現象に目を向けることこそ重要である」という考えから出発して、コロケーションを「慣用語的な複数語の共起現象」と規定している。(田野村 2012 : 212)。

拡張意味単位について詳しく紹介されている日本語の文献には石川慎一郎先生が訳したトニー・マケナリー、アンドリュー・ハーディー (2014) がある、本稿で使う専門用語もこれに従っている。その紹介によると、拡張意味単位とは、個別語を超え、複数語からなるコロケーション(collocation)を包含するものであり、ノード (node) ・コロケーション・文法的共起結合(colligation) ・意味的選好性(semantic preference) ・意味的韻律(semantic prosody) という五つの要素で共同的に確定される。文法的共起結合・意味的選好性・意味的韻律はすべてコロケーションの抽象形態である。次では、トニー・マケナリー、アンドリュー・ハーディー (2014) に従って、この五つの要素についてそれぞれ紹介する。

### 3.1.1 ノード

コーパスを検索するツールはよくコンコーダンスと言われる。ノードとはコンコーダンスを使って検索するときに入力したキーワードのことであり、よく KWIC(Key Word in Context)の形式でコンコーダンス・ラインの中間位置に出現する中心語のことである。同形語の研究においては、ノードとは我々の関心のある同形語のことである。

### 3.1.2 コロケーション

この用語は研究者や言語学の領域ごとにその定義がそれぞれ異なるが、中心語と共起語(collocate)の共起であるという点ではほぼ共通している。意見の分岐点は、共起語の位置をどう限定するか、コンコーダンス検索に基づく特定法を使うのかそれとも統計的指標に基づく特定を使うかなどがある。Sinclair (2004: 10) は中心語と共起語の関係を次のように定義している。中心語(node)とは、その語と他の語の全体的な共起パターンが調査対象になっている語彙項目のことである。共起語(collocate)とは、一定の範囲(span)内で中心語と共に出現するあらゆる語彙項目のことである。前述した田野村の定義も語と語の共起という点で共通しているが、「慣用性」をどう判断するかはやはり研究者の内省によるものであり、明示的な基準がないと操作的には判断しにくい。

本研究では、中心語と共起語は必ずしも隣接している必要はなく、共起頻度と共起強度という両指標で特徴的なコロケーションを特定する立場をとることにする。つまり、中心語の左とその右の一定の距離(スパン)に出現する語のなか、統計的な意味を持つ一部の項目だけを共起語とする。

### 3.1.3 文法的共起結合

文法的共起結合とは個別語と文法範疇・文法的コンテクストとの共起である。つまり、ひ

とつのコリゲーションが一種のコロケーションを代表している。研究者によっては、コリゲーションとも訳される。ここで言っている文法範疇・文法的コンテクストとして、品詞、文法標識などがよく使われる。

文法的共起結合の抽出方法として、ノードの付近のテキスト要素を文法的類似性という基準でまとめる。

日本語研究において、滝沢・千葉(2016)がコリゲーションを「当該表現が用いられる文法的なパターンという性格の強いもの」、当該表現を使用する際の『文法的な癖』と指摘したうえで、「学習者にとって語彙的なコロケーションと同様に重要な情報と言える」とも指摘している。

### 3.1.4 意味的選好性

意味的選好性とは、個別語と同一意味範疇に属する語群との共起パターンである。コロケーションとは違って、当該範疇に属する個々の語との共起例はそれほど高頻度ではないが、意味範疇全体として考えると、当該語と高頻度に共起しているようなものである。意味的選好性の抽出方法として、ノード付近の語や句の意味的類似性という基準でまとめる。

### 3.1.5 意味的韻律

意味的韻律とは何らかの語・句が常に肯定的あるいは否定的意味で使用される傾向性のことである。Stubbs (2001) が提案する用語法を使う研究者には、談話的韻律 (discourse prosody) とも呼ばれる。つまり、意味的韻律が談話レベルの概念であることをも示している。

意味的韻律の抽出方法としては、内省ではかならずしも見つからなく、Louw (1993 : 159) が指摘しているように、むしろコンコーダンス分析によってのみ発見が可能である。

意味的選好性と意味的韻律はともに複数の異なるコロケーションを抽象したであるという点で類似している。意味的選好性が定義可能ならあらゆる意味領域を扱うのに対して、意味的韻律は肯定的評価・否定的評価・中性的評価のいずれかしか扱わない。

## 3.2 分析のプロセス

拡張意味単位の分析でよく使われる方法では、主に以下の手順に従って行う。

Step1 : コンコーダンスーでスパンを決めて、中心語を入れて検索する。

Step2 : コーパスから中心語を含んだコンコーダンス・ラインを抽出して観察し、構成されている主な文法的共起結合をまとめる。

Step3 : Step2 でまとめた文法的共起結合を参照しながら、決められたスパンに出現する共起語を観察して、共起語の示した意味的選好性と共起コンテクストの示した意味的韻律をまとめる。

## 3.3 使用コーパスと分析ツール

ここで、本研究で使うコーパスと検索ツール、共起語の判定基準などについて紹介する。

コロケーションの使用状況は言語使用域 (register) ごとに異なる可能性があるという先行諸研究の指摘を受けて、本研究では代表性のある均衡コーパスを使うことにした。日本語の場合は『現代日本語均衡コーパス (BCCWJ)』を、中国語の場合は『国家語委現代汉语語料庫』を使うことにする。コーパス検索ツールとして、日本語の場合は NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) を、中国語の場合は AntConc3.5.7 をそれぞれ使った。

両コーパスから得られたデータの相互比較可能性という点から考えれば、コロケーションを判定とき、共起強度を測る指標として両検索ツールで共に使える MI-score という指標を使うことにした。MI スコアは統計指標の一つで、特徴的なコロケーションほど数値が高くなる傾向がある。ただし、低頻度のコロケーションの数値が過剰に高くなるため、低頻度のものを排除する必要がある。ここで、頻度が 5 以上と MI-score が 3 以上という両条件で特徴的なコロケーションを特定する。

NLB を使えば、共起のパターンと頻度、共起語の頻度と共起強度など簡単にまとめることができるが、AntConc3.5.7 を使って検索する前に、共起語の範囲 (span) をあらかじめ設定する必要がある。英語や中国語の研究で、スパンを左右 4 語や 5 語にするのが多いという現状を踏まえて、ここでスパンを左右 5 語にした。

“精神” と「精神」の翻訳状況を調べるときに、中日対訳コーパスを使った。

#### 4. 結果と考察

調査した結果は以下のとおりである。

##### 4.1 中国語の“精神”の分析

拡張意味単位モデルを使って、“精神”を分析した結果を以下の表 1 に示す。

表 1 中国語の“精神”の分析<sup>1)</sup>

コロケーション	共起語(代表例)	意味的選好性	意味的韻律
N+精神(N)	民族(261) 科学(152) 时代(160) 传统(97) 艺术(93) 创新(93) 献身(86)	社会	肯定的
精神(N)+N	革命(248) 中央(83) 指示(73) 爱国主义(67) 会议(61) 生活(382) 文化(198) 面貌(134) 力量(129) 工作(105) 方面(85) 境界(85) 享受(42) 财富(23) 价值(35) 障碍(65) 疾病(52) 病患者(48)	政治 社会	肯定的 肯定的
V+精神(N)	贯彻(164) 发扬(160) 学习(124) 表现(100) 具有(86) 体现(85) 开拓(81) 培养(72) 落实(65) 实践(58) 发挥(32) 振奋(174) 打起(28) 振作(23) 强打(14)	医学 集团	消極的 肯定的
V得+精神(A)	显得(24)	個人	肯定的

《国家語委現代汉语語料庫》を使って“精神”のコンコーダンス・ラインを分析した結果、“精神”が名詞と形容詞と二種類に使われるということが分かる。

<sup>1)</sup> 表 1、表 2 の共起例の後ろにくる括弧にある数字は本共起語の検出頻度である。



形容詞としての“精神”がよく“V得+精神 (Adj)”という文法的共起結合を構成している。その前に程度を表す副詞がよく来る。共起する動詞には“显得”、“长得”などが来る。名詞としての“精神”とよく共起する品詞には動詞、名詞などがある。

#### 4.2 日本語の「精神」の分析

拡張意味単位モデルを使って、“精神”を分析した結果を以下の表2に示す。

表2 日本語の「精神」の分析

コリゲーション	共起語(代表例)	意味的選好性	意味的韻律
精神+N	障害(826) 保健(373) 状態(256) 力(184) 疾患(129) 症状(83) 異常(61) 神経症(24) 錯乱(23)	医学(個人)	消極的
	分析(308) 病院(182) 医学(180) 医療(87) 健康(8) 文化(39) 風土(20) 文明(14)	医学 社会	中性的 肯定的
	N+の+精神	憲法(28) 奉仕(23) 時代(22) 国民(21) 法(18) 不屈(15) 人間(81) 自分(40) 人々(22) 患者(21) 子供(12)	政治や社会 個人
N+精神	サービス(68) チャレンジ(41) 批判(34) ハングリー(32) 愛社 (26) 時代(14) 尊法(21) 反骨(20) 民族(19) ボランティア(16) キリスト教(10) 批評(9) 互助(7)	政治や社会	肯定的
	精神+V	持つ(103) のつとる(24) 基づく(24) 発揮する(20) 富む(16) 受け継ぐ(13) 活かす(11) 高める(11) 失う(10) 鍛える(10) 反する(20) 従う(7) 病む(24) 集中する(31) 養う(17) 安定する(10)	集団 医学(個人) 個人

NINJAL-LWP for BCCWJ を使って「精神」のコンコーダンス・ラインを分析した結果、「精神」が名詞として使われ、頻度データからみれば、よく共起する品詞には動詞、名詞などがある。

#### 4.3 “精神”と「精神」の共通点と相違点

共通点：

中国語の“N+精神 (N)”と日本語の「N+の+精神」と「N+精神」とが大体対応している。中国語の“精神 (N) +N”と日本語の「精神+N」とが大体対応している。中国語の“V+精神 (N)”と日本語の「精神+V」とが大体対応している。

相違点：

1)中国語の“V得+精神 (Adj)”という文法的共起結合が特徴的な存在である。日本語の「精神」はこんなパターンとして使われていない。

2)名詞との共起について

頻度分布からみれば、中国語のほうは“N+精神 (N)”が“精神 (N) +N”より“N+精神 (N)”を多く使っているのに対して、日本語のほうは「精神+N」を多く使用している。

意味的選好性からみれば、中国語のほうは主に「政治的」、「社会的」という意味特徴を示しているのに対して、日本語のほうは「医学的」のほうが多い。

中国語のほうは主に肯定的な意味的韻律を示しているのに対して、日本語のほうが否定的なもの、肯定的なものも多く使用している。

### 3) 動詞との共起

“振奋、打起”と共起する“V+精神(N)”が特徴的である。日本語の「精神」はこんなパターンとして使われていない。

## 4.4 対訳からみた対応状況

ここで、中日対訳コーパスを使って、“精神”と「精神」がどのように訳されているのかについて調査した。その結果を以下のようにまとめる。

### 4.4.1 “精神”の日本語訳

#### a. 精神

例(1) 原文：“不过你的精神状态真好。”（插队的故事）

訳文：「でも精神状態はよさそうじゃない」

例(2) 原文：当时还不懂神经科与精神科的区别（活动变人形）

訳文：当時はまだ神経科と精神科の区別不明

例(3) 原文：他们有着一种精神上的优势（钟鼓楼）

訳文：彼らは精神的な面で優位にあった。

例(4) 原文：欧洲人完全缺少这样一些精神。（关于女人）

訳文：ヨーロッパ人にはこうした精神が完全に欠落している。

#### b. 元気（気、気分、気力、英気、気持ち、など）

例(5) 原文：高大泉把手里的黄土攥热了，忽然朝空中一扬，望着那金黄色的烟雾，精神抖擞地说…（金光大道） 訳文：高大泉は熱くなるほど握りしめていた上をパッと空に放りあげ、黄色い土煙の中で元気一杯に言った。

例(6) 原文：但她的精神集中在肉饼上，她并不注意妹妹的评论。（活动变人形）

訳文：だがどちらかというと、肉シヤピンに気を取られて、妹の文句は聞きながすほうだ。

例(7) 原文：知道自己的琴声能给方丹带来精神上的解脱和安慰，她心中感到了莫大的快乐，同时也唤起了一种强烈的责任感。（轮椅上的梦）

訳文：自分の演奏が方丹の気持ちをほぐし、なぐさめるのを知って、とてもうれしく、また新しい責任も感じた。

### 4.4.2 「精神」の中国語訳

#### a. “精神”

例(8) 原文：「応援の仕方はいくらでもある。精神的に応援してくれたらいい。何をしなくてもー」（あした来る人）

訳文：“支持的方式有的是。精神上的支持也可以，即使什么也不做……”

例(9) 原文：僕は瀬川君を精神病患者だと言う訳では無いよ。(破戒)

訳文：我可不是说瀬川兄是精神病患者。

例(10) 原文：玄関の正面に《愛郷精神》と、大きな横書きの額がかかっている。(砂女)

訳文：大门正面挂着个大横匾，上书“爱乡精神”。

#### b. “思想・毅力・心思”など

例(11) 原文：故郷の親達は、学生的身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既にその精神の墮落であると云ったが、決してそんな汚れた行為はない。(布団)

訳文：尽管老家的亲人说，作为一个学生偷偷地和男人到嵯峨去游山玩水，说明思想已经墮落，但她自己认为绝对没有那种肮脏的行为。

例(12) 原文：繼續して稽古をつづけるにはかなりの精神力が要求されますが... (ひとりっ子の上手な育て方) 訳文：要想坚持下去，必须要有相当的毅力。

例(13) 原文：丑松はその精神を酌取って、父の用意の深いことを感ずると同時に、又、一旦こうと思立ったことは飽くまで貫かすには置かないという父の気魄の烈しさを感じた。(破戒) 訳文：丑松懂得父亲的心思，领会到父亲深切的用意，同时也十分钦佩父亲那种不实现自己的愿望誓不罢休的壮烈情怀。

筆者が行ったサンプル調査では、日本語の「精神」が、85.85%という高い比率で“精神”に訳されている。中国語の“精神”の訳語には「精神」が一番多いが、訳者の個人的なスタイルがあることも示唆している。典型的な例としては、立間詳介が訳した『駱駝祥子』には“精神”の訳語として日本語の「精神」を一例も使っていないということである。これが“精神”と「精神」との対訳の非必然性を示しているのではないかと思う。

“精神”が「元気(気、気分、気力、英気、気持ち、など)」に訳される場合の特徴をまとめると、以下のような文法的結合をなしてということが分かる。

1) V得+精神 (a)

2) “振奋、打起”と共起する“V+精神(N)”

3) 共起する主語が集団ではなく個人の場合。

つまり、“精神”と「精神」の文法的共起結合が似ている場合、互いの訳語になりやすい傾向にある。“精神”が特徴的な文法的共起結合をなしているとき、「精神」ではなく、「元気(気、気分、気力、英気、気持ち、など)」などに訳される。

#### 4.5 本モデルの有用性とその限界

拡張意味モデルの発想では、一つの単語の意味は常に不定であり、その意味を確かめるにはまず語と語の結合、つまりコロケーションから始める必要がある。これは明かに施・洪(2013)が提案した“層次分析法”とは異なる。

施・樵 (2016) が中日同形語の分析における対訳コーパスの有用性を唱えて、F-measure で同形語の意味用法の距離を測る方法も提案していたが、本研究では対訳コーパスの有用性を「検証」に止めて、相互対訳率などの指標に対しても控えめに見ている。Mona Baker などのコーパス翻訳研究 (Corpus Translation Study) 学者が翻訳言語を目的言語 (Target Language) とは異なる一種の「中間的な言語」と見なしている。訳語が源泉言語 (Source Language) から影響を受けている例として、日本語や中国語の「欧化」現象がある。中日同形語は表記上の類似性のうえに、本研究で分析した「精神」のように、共起語の一部が共通しているほか、文法的共起結合、意味的選好性、意味的韻律の面にも類似性を示している。「精神」が互いの訳語になりやすいのは、同形語の類似性に基づいた「類推」という訳者の認知能力が働いているのではないかと思う。

「精神」の前後に来る語の頻度から見れば、表1と表2からも分かるように、日本語の「精神」が「障害」、「保障」と、中国語の“精神”が“民族”、“生活”、“革命”ともっともよく共起する。言い換えれば、日本語で「精神」というと「障害」がもっとも来やすいのに対して、中国語の“精神”という“民族”がもっとも来やすい。同形語を分析するときに、このような頻度面の差も同形語の異同の記述に取り入れる必要があると思う。

語の意味を文脈に求めて、コロケーションから分析するという点において、拡張意味単位モデルは中日同形語の分析に適用できるいい方法論にはなるが、いくつかの問題点もあると思う。“層次分析法”が操作の面において実施しやすいのに対して、拡張意味モデルについては、特に意味的韻律は抽出しにくいと思われる。また、意味的韻律はマクロの面から肯定的、否定的、中性的というふうに分類しているほか、また何種類かのミクロ的な分類法も提案されている。このほか、意味的韻律の抽出は完全に研究者の内省によっているので、同じ三分類法を使ったにしても、研究者によって抽出したものが異なる可能性がある。実は、意味的選好性の抽出についてもこんな問題点を持っている。拡張意味単位モデルを使う研究をいかに規範化するのかについてはさらなる探索する余地があると思う。

## 5. 結語

本稿では、日中同形語に関して一連の研究を実施してきた施建軍らの研究を踏まえて、Sinclair が提案した「拡張意味単位」モデルに基づいて、均衡コーパスと対訳コーパスを併用することで日中同形語を分析する分析方法を示した。分析例としては、日中同形語である「精神」を選んで、両均衡コーパスを使って“精神”と「精神」の異同を分析した。また、対訳コーパスで“精神”と「精神」がどんな訳語に対応しているのかを調査して、「拡張意味単位」という枠組みで分析した結果の有用性を検証した。

今回の文法的共起結合の分析では、文法範疇として一部の品詞しか分析しなかった。今後、ほかの品詞や文構造との共起、もっと複雑なコリゲーションの構成などの面からも詳しく分

析してみたい。また、拡張的意味単位という枠組みを使って、形式・意味・機能から語や句を考察する方法は、単一言語の類義語の研究だけでなく、言語間の対応単位の対照研究にも役立つよい方法と思う。今後、分析対象を、拡張的意味単位という枠組みを連語などのような同形語以外の中日対応単位に適用する可能性をさらに探りたいと思う。

## 言語資料

現代日本語均衡コーパス (BCCWJ) NINJAL-LWP for BCCWJ  
国家語委現代汉语語料庫  
中日対訳コーパス

## 参考文献

- Sinclair, J. (1996) The search for units of meaning. *Textus*, 9: 75-106.
- Stubbs, M. (1995) Collocation and semantic profiles: On the cause of the trouble with quantitative studies. *Functions of Language* 2(1): 23-55.
- Stubbs, M. (2001) *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. Blackwell.
- Douglas Biber, Susan Conrad and Randi Reppen [著] ; 齊藤俊雄 [ほか] 共訳 (2003) 『コーパス言語学：言語構造と用法の研究』, 南雲堂: 11-14.
- 石井正彦 (2014) 「コーパス日本語学の基礎—「言語的連結パターン」によるマルチレベル分析—」. 『The Japanese Language Association Of Korea』, 1-7.
- 石井正彦 (2018) 「探索的コーパス言語学のための覚書」. 『現代日本語研究』, 10: 81-98 .
- 大塚秀明 (1990) 「日中同形語について」. 『外国語教育論集』, 12 : 327-337.
- 大河内康憲 (1992) 「日本語と中国語の同形語」大河内康憲 (編) 『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』, くろしお出版 : 179-215.
- 滝沢直宏・千葉寿寿 (2016) 「コーパス検索の方法」砂川有理子 (編) 『コーパスと日本語教育』, 朝倉書店 : 1-34.
- 田野村忠温 (2012) 「日本語のコロケーション」, 堀正広 (編) (2012) 『これからのコロケーション研究』, ひつじ書房 : 193-226.
- トニー・マケナリー, アンドリュー・ハーディー著; 石川慎一郎訳 (2014) . 『概説コーパス言語学: 手法・理論・実践』 . ひつじ書房 : 181-247.
- 宮島達夫 (1993) 日中同形語の文体差. 『阪大日本語研究』, 5 : 1-18.
- 曹大峰 (2006) 汉日平行语料库与翻译研究[J]. *外语教学与研究*, 38(3) : 221-227.
- 施建军, 洪洁 (2013). 汉日同形词意义用法的对比方法研究. *外语教学与研究(外国语文双月刊)*, 45(4) : 531-542.
- 施建军, 许雪华 (2014). 再论中日两国语言中的同形词问题. *解放军外国语学院学报*, 37(06): 132-139.
- 施建军 (2014). コーパス言語学の立場から日中同形語の分類を考え直す. *外语教育研究*, 2(03): 12-17.
- 施建军, 譙燕 (2016). 中日同形词意义用法距离的计量研究——以对译比构建的 F-measure 为尺度. *解放军外国语学院学报*, 39(04): 76-84+160.
- 卫乃兴 (2014). 《对比短语学探索 来自语料库的证据》, 外语教学与研究出版社.